

# 日本周辺国際魚類資源調査委託事業

宮本敦史・田岡明将・大野恭我・平工智一・北村勇人・久保典敬・岩田定和

## 目的

太平洋を広く回遊するカツオ・マグロ類について、資源評価や資源動向の予測、我が国周辺への来遊量の予測等を行うために必要な科学的情報を収集、整理することを目的とする。

## 方法

### 1 沿岸域における漁獲実態調査

県内におけるカツオ・マグロ類(クロマグロ、キハダ、メバチ、ビンナガ)の主要水揚港である和具、浜島、宿田曾、奈屋浦、紀伊長島、尾鷲の各港において、漁業種類別の水揚状況を調査した。また、クロマグロの加入状況を把握するため、クロマグロ養殖用種苗の採捕状況を調査した。

### 2 沖合、遠洋漁場における漁獲実態調査

沖合、遠洋漁場における中型、大型竿釣船の漁獲動向については、三重県漁労通信連合会及び近海漁労通信会所属の標本船から「無線漁況連絡聴取簿(QRY情報)」の提供を受け、カツオ・ビンナガ漁船の月別、旬別稼働隻数及び漁獲量を緯度・経度毎に整理し、漁場の推移や漁況について調査を実施した。

## 結果及び考察

収集した QRY 情報をもとに、本県所属船のカツオ・ビンナガ竿釣漁場の変遷を「令和 5 年における三重県中型・大型竿釣船のカツオ・ビンナガ漁況総括」としてとりまとめ、漁場探査の参考資料として関係漁業者に提供した。また、カツオ・マグロ類の漁獲動向を国立研究開発法人水産研究・教育機構水産資源研究所(以下、水研機構)に提供した。これらのデータは、太平洋におけるカツオ・マグロ類の資源量評価及びそれに基づく資源管理方を検討する国際会議において活用されたほか、日本周辺海域への来遊量予測の科学的根拠としても利用された。資源評価や来遊量予測に関する結果の詳細については水研機構から報告されるため、ここでは本県所属船の 2024 年(令和 6 年)漁期におけるカツオ・マグロ類の漁況概要をとりまとめた。

### 1 沿岸域における漁獲実態調査

#### 1) 沿岸曳縄船

2024 年における主要 4 港(和具・浜島・長島・尾鷲)

の曳縄船によるカツオ水揚量は 438 トンで、前年(102 トン)及び過去 10 年平均値(71 トン)を上回り、過去 10 年では最高で、2003 年以来の高い水準となった(図 1)。主要 4 港の水揚量と水揚隻数から求めた年間の平均 CPUE は 98kg/隻で、前年(34kg/隻)の約 3 倍、過去 10 年平均値(42kg/隻)の約 2.3 倍となった。曳縄船で漁獲されたカツオの銘柄は、中(2~3kg)が主体であった。

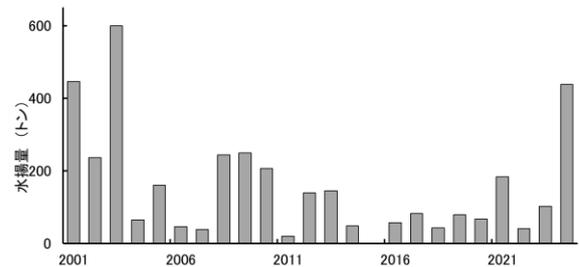


図 1. 沿岸曳縄船による主要 4 港のカツオ水揚量(2001~2024 年)

#### 2) 小型竿釣船(19 トン以下)

2024 年における主要 4 港(和具・浜島・長島・尾鷲)の小型竿釣船によるカツオ水揚量は 516 トンで、前年(510 トン)並みで、過去 10 年平均値(593 トン)の 87%の水揚量となった(図 2)。主要 4 港の水揚量と水揚隻数から求めた年間の平均 CPUE は 947kg/隻で、前年(852kg/隻)を上回り、過去 10 年平均値(1,003kg/隻)を下回った。小型竿釣り船で漁獲されたカツオの銘柄は、中(2~3kg)と中小(1.5~2kg)、大(2.5~4kg)が主体であった。

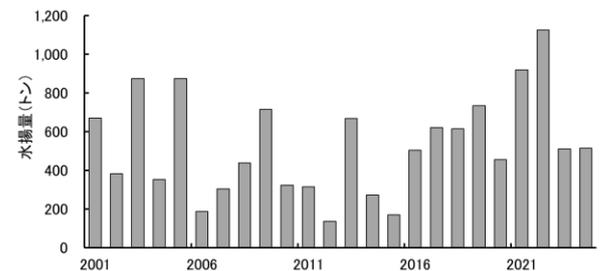


図 2. 小型竿釣船による主要 4 港のカツオ水揚量(2001~2024 年)

### 3) クロマグロ漁業種類別水揚げ状況

主要 6 港(和具、浜島、宿田曾、奈屋浦、紀伊長島、尾鷲)における 2024 年のクロマグロ水揚量(全漁業種)

は 39.6 トンで、前年 (37.0 トン) の 107%, 過去 10 年平均 (17.5 トン) の 226%と、近年では 2016 年 (45.4 トン) に続く水揚げとなった。例年と同様に小型魚の水揚げが主体であり、ヨコワ銘柄 (体重 10kg 未満) の水揚げが 63%を占めた。漁業種類別では、定置網、中型まき網、曳縄の水揚げがそれぞれ 35%, 31%, 31%を占めた (図 3)。

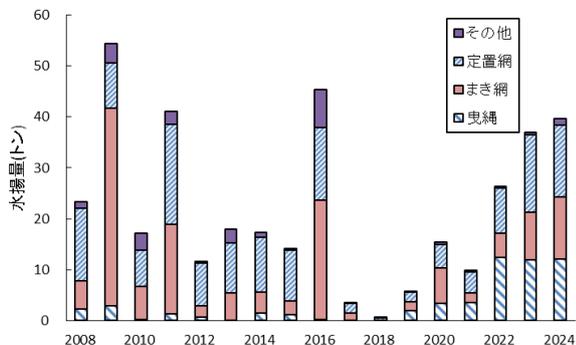


図 3. 主要 6 港の漁業種類別クロマグロ水揚げ量 (2008～2024 年)

#### 4) クロマグロ養殖用種苗 (ヨコワ) の採捕状況

熊野灘沿岸域における 2024 年の養殖種苗用ヨコワ漁 (曳縄) は、前年より 7 日遅い 7 月 25 日から始まり、前年より 15 日早い 8 月 4 日に終漁した。標本漁協所属船によるヨコワの活け込数量は 10,825 尾で、前年の 145%であった。採捕尾数と有漁隻数から求めた CPUE は 17.0 尾/隻で、2011 年以降で最高となった (図 4)。

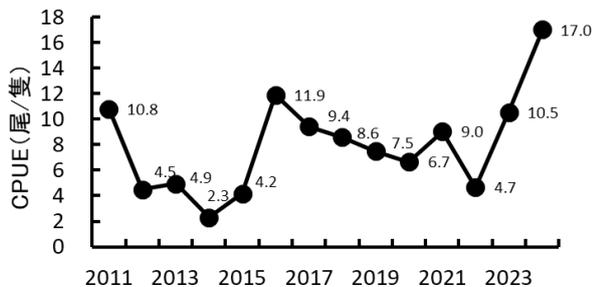


図 4. 標本漁協所属船によるクロマグロ養殖用種苗 (ヨコワ) CPUE の経年変化

#### 2 沖合、遠洋漁場における漁獲実態調査

沖合、遠洋漁場における漁獲実態調査のうち、ここでは沖合漁場の調査結果を報告する。QRY 情報に基づく 2024 年の三重県中型竿釣船によるカツオ漁獲量は 7,126 トンで、前年 (6,028 トン) の 118%, 過去 10 年平均 (5,366 トン) の 133%で、過去 10 年では最高となった (図 5)。操業は、2 月から硫黄島周辺で操業が始まり、3 月には南西諸島の奄美大島周辺でも操業した。4 月は紀伊半島南沖や八丈島周辺でも操業し、5 月以降は徐々に常磐沖から三陸沖に移動して操業した

2024 年の三重県中型竿釣船によるビンナガの漁獲量は 887 トンで、前年 (2,137 トン) の 42%となり、低水準であった 2022 年 (848 トン) 並みとなった。

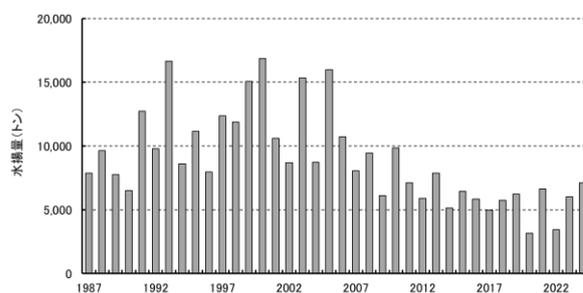


図 5. 三重県中型竿釣船によるカツオ漁獲量 (1987～2024 年)

#### 関連報文

令和 6 年における三重県中型・大型竿釣り船のカツオ・ビンナガ漁況総括, 三重県水産研究所 (2025) .